
とある科学の十字障壁<クロスロード>

あくせる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の十字障壁<クロスロード>

【Nコード】

N3903X

【作者名】

あくせる

【あらすじ】

呪われた力を持つ少年と、穢れた運命に呪われた少女。科学と魔術が交差するとき、物語は始まる。！！

とある少年のお話

*

「……うわぁー、マジで最悪だぞコレ」

俺の名前は枢木 護。職業は、しがない高校一年生である。

『やったぁー!! 今日から夏休みだア!!』と終業式を迎えた昼間から、薄暗くなってきた今まで遊び呆けていたのだが、今はとてつもなく最悪な状況に陥っていた。

「ねえ、君バイトしない？仕事って言っても俺の財布の代わりにするだけだからさあ」

「そうそう。ボコられる代わりに財布になるんだぜ。良い話だろ？」

俺の目の前にいるのは明らかに煙草スパスパ吸っている、心肺機能にも俺の財布にも悪い二人の不良。

何かもう、帰らせていただけませんか？お金なら置いていきますんで（残金税込み105円也）。

と、そんなに上手く行かないのが俺の日常。

嫌です、と不良の優しいお誘いをお断りした俺は成されるがまま、両脇をガツチリホールドされて路地裏へ。残念なことに、学園都市はビルも多いが、路地裏も多いのだ。

「っ、さて……せめてサンドバッグの代わりぐらい殴らせてくれよ」

「そうそう。もち、代金は取らないからさあー」

とか言って拳の関節やら首をゴキゴキ鳴らし、準備運動を始める不良たち。

いや、先ずはタコ殴りされた後の俺の治療費を要求したいんですけど。どうせ拒否されるのは目に見えてるけどさ。

……ま、どちらが勝つか、それは戦う前から解っている事だけだ。

俺も目の前の不良どもを見習って肩やらをぐるぐる回してやる気がある様子を見せつける。そして俺は此所が”裏”であることを良いことに、口角を吊り上げ怪しく微笑む。

「ふうーん。取り敢えず、”喰う側”が”喰われる側”に変わらなように注意しやがれッ！」

先手必勝。俺はこの無駄に煩い不良どもを黙られるため、両手を体の前に突きだし、”能力”を発動させようとするが、

その演算は、目の前、つまり不良の背後に広がる暗闇の通路から聞こえてくる足音に中断された。

コッソ、コッソ、と狭い路地裏に楽しく響き渡るソレは、俺の視線と共に、不良の注意も引き付けるのに十分すぎる程怪しいものであった。

そして、靴の音を響かせながら路地裏の影から生えるように出てきたのは、

「超面倒です。こんなSFみたいな力技の任務は麦野に超丁度いい

のじ」

それは、12才くらいの女の子だった。如何にも無害そうな優しい顔立ちの、ミニスカートの上に羽織ったパーカーがよく似合う可愛い女の子。ビューティフルではなく、キュートな感じの。

そんな少女の姿を確認するや否や、今さっきまで弱気な態度であった不良どもが調子に乗り出した。

「……おや？君は一人？迷子かな？良かったらお兄さんたちと良いことして遊ばない？」

「大丈夫。悪いようにはしないからねえ？」

不良たちは調子に乗っていた。

だから、不良たちは気付かない。目の前にいる少女の”異質さ”に。異質な美少女は言い寄ってくる不良×ゴミ×どもを一瞥し、ふうーと短く息を吐いて口を開いた。

「超邪魔です」

次の瞬間、少女のデコピンを喰らった不良の一人が弾き飛ばされた。弾き飛ばされた不良は自分の身に何が起こったのか理解しないまま、ビルの壁に激突し動かなくなった。

「このアマアアアア!!」

残された不良は足元に落ちていた木材>ユウシャノケン<を取り、仲間の敵である美少女>マオウ<の頭を殴り飛ばした。殴り飛ばされた少女の頭は熟れたトマトのように叩き潰され、ぐちゃぐちゃになる。

しかし、現実には砕け散ったのは少女の頭ではなく、薄汚れた木材の方だった。

「ひいー」

そんな情けない声を上げた不良は、手に砕けた木片を持ったまま後退する。不良の頭の中は目の前の少女の姿をした、恐怖で一杯になった。

「もういいですか?こっちも予定が超詰まっているので早く何処か

に消えてください」

さもないと超我慢できないので、と少女が地面を蹴るとその地面がへこんでクレーターが出来た。

そんな怪物染みた光景を目の当たりにした不良は、ガタガタ震えながら近くに落ちていた不良を抱えあげて、一目散に逃げていく。ざまあ。

この街では『路地裏の不良』最強』という構図は成り立たない。この街の不良は『使えない』レベル0<』の烙印を押された、文字通りの不良品。彼らは蹂躪する側ではなく、蹂躪される側として扱われている。

「で、貴方は超逃げないんですか？」

「ん？」

使えない烙印を押された不良たちを嘆いていると、その少女はへツピリオブジェクトと化していた俺の方を振り返る。

いきなりの話の展開に俺は少女の言おうとしている事が解らなかつた。

「何で俺が逃げなきゃいけないんだよ？」

「貴方は私が超怖くないんですか？」

確かに彼女の言う通りだ。俺は彼女の化け物染みた力を垣間見た。これで恐怖を抱くなど言う方が難しい。いや、むしろ既に抱えています。

この可愛い少女は、コンクリートの地面を細く白い足で粉々に砕いたのだ。誰だよ。この女の子をサヤ人に変えたやつ。

例え彼女が超絶美少女だったとしても、戦闘力がかなり高いのは怖いに決まっている。

それでも逃げない理由はただ一つ。

「怖いけど、まだお礼してないし」

「は？」

すっとなきょうな答えが返ってきたので、俺は繰り返す。

「だから、君は怖いけどまだ助けてもらったお礼してねえだろ」

少女は『この目の前の男は超何を言っているのですか？』というような表情をしたまま固まっかている。対する俺もこんな事は慣れてないのになあー、と頭を掻きながら説明する。

「いやー、えーっと、不良に絡まれてたのは俺だったから。

君がイライラして不良をブツ飛ばしたとしても、君が俺を助けたことに変わりはないだろ？だから、そのお礼をしたいなって」

俺が苦笑いしながらそう言うと、目の前の少女はプツと吹き出した。何でそこで吹き出すんだよ。コツチは大真面目だぞ。

「貴方は超変わってます。そんなおかしな事を言う人は初めて見ました」

そうやって笑顔を絶やさない女の子は、年相応の和やかな雰囲気醸し出していた。今さっきまでの氷のような冷たい雰囲気や微塵に感じさせない程に。では、今さっきまでの彼女の雰囲気は何だったのだろうか？

暖かい彼女と、冷たい彼女。どちらが本当の少女の姿か、俺の頭では考えることは出来ない。

「まあ、自分がおかしな奴だって事は自覚はしてんだけど」

すると、少女は笑顔のまま、

「お礼ですか……そうですね……」

空気が変わる。

「じゃあ死んでください」

そして、少女は笑顔のまま俺に殴りかかってきた………ツ!!

「マジかよツツ!?!」

「超大真面目です」

俺が急いでバックステップで拳をかわすと、俺がついさっきまで立っていた場所が陥没した。

「超避けないでください」

「そんなの無理だよッ！何ですか、このいきなりの無理矢理急展開！！誰か俺に分かりやすく説明してくれ！」

「そんなの、私が貴方を狙う殺し屋だからに超決まってるからです」

それなんてゴルゴ！？とか言う既に意味不明な突っ込みを吐きながら、ひたすら拳をかわす俺。

いや、可笑しいとは思いましたよ？だって俺みたいな脇役が、こんな美少女と遭遇>エンカウント<するイベントなんて発生するわけないし。何処かの不幸な奴みたいにフラグ立てること無理な事ぐらい解ってたけど。

それでも少しぐらい期待はしてたんだよッ！宝くじ買ったときぐらい仄かな期待を懐いてたんですよッ！

それがいきなり殺し屋にガチで命狙われるなんて、

「超最悪だアアアッ！！」

「私の真似は超やめてください……ッ！」

そして何故か拳を避け続けれる俺に対して、イライラした少女はポケットから何かを取り出し、俺に向けて構えてきた。

言わずもがな、黒光りが激しい例のアレ、銃です。

そんなもの喰らったら一発で天国行きな俺は、路地裏の壁に立て掛けてあったゴミ箱の蓋を盾にする。

ドン、という音より早く俺に迫ってきた弾丸は蓋を持つ俺の手を十二分に痺れさせる。盾はへこんではいるが、まだまだ盾として使えるようだ。流石学園都市。たかが金属製のゴミ箱の蓋一つとっても高性能である。

だから俺はその蓋を少女に投げつける。銃弾にすら耐えるソレは円盤のように回転し、少女の頭を捉えるが、

「そんな柔な攻撃は超効きませんから」

少女に当たる直前、蓋は何かに阻まれ、そのまま地面に落ちた。

「だろうな、だから狙いはコツチだ」

ザッ、と地面を蹴り飛ばした俺は少女の目と鼻の先まで接近した。蓋を投げたのは目眩まし。そして、ここまで接近すれば、俺の攻撃も通るはず。

俺は右手を突きだし、唱える。

「ファイアブレスッ!!」

豪、とうねりながら、俺の右手から発生した炎は0距離で少女を覆い、燃やし尽くす

訳にはいかなかった。

赤く燃え盛る大きな炎は少女を燃やすことなく、少女が右手を振るだけで消えてしまった。

俺の渾身の攻撃もまた目眩ましにしかならない。いや、目眩ましで十分だ。

「こっから形勢逆転だぞ、コラアアアア!!」

「とか超叫びながら走って逃げるのはどうかと思いますが」

いちいち煩いぞ!! 逃げるが勝ちってのは、大昔からの鉄則なんですよ!

俺はもう一度少女の方に向かって炎を放ち、少女の視界を塞ぐ。後ろから銃を撃たれたりしたら話にならない。

しかし、目眩ましとかいう素人のような攻撃を少女は読んでいて、

「同じ手は超喰らいません!」

信じられない事に少女は迫り来る炎をもともせず、俺に突っ込む。

「でも残念! 似たような手を何度も出すかよ」

少女に向かっていたかのようにみえた俺の炎は、近くのゴミ箱を吹き飛ばし、少女の視界に多くのゴミを撒き散らす。

「……、なッ!」

炎の中を通るのを躊躇わなかった、殺し屋の少女の足が止まった。少女の視界をゴミだけでなく、埃も舞っていて前方を完全に塞いでいた。

「うっ、ち、超臭いです」

止めは処理される前の生ゴミの腐敗臭。この強烈な臭いを前に動ける女の子がいるだろうか？

そして、俺は鼻を手で摘まみ手が塞がった少女を尻目にじめじめした路地裏を飛び出した。俺が走りながら西の方を見てみると、太陽は完全に沈んでいた。表の『学園都市』は既に薄暗く濃青に染まっており、俺がどれだけ長い間裏にいたのかを教えてくれている。

しかし、これは気休めにしかならない。きっと少女も俺を追い駆けて来るだろう。裏の人間が甘くないのは既に学習済み。

でも俺は彼女を倒す方法なんて持ち合わせていない。

（あー、……面倒くせー。ツたく、そもそも7月19日がいけないんだよ。7月19日がいけないに決まってるですよ、コンチクショ
ー！！！！）

ん？待てよ？と俺は考える。今日は7月19日。確か今日は……。
俺は脳みそをフル回転させて自分の思考を纏めあげ、思わず
顔が緩んでしまった。

うん。これならいけるかもしれない。彼女の超能力>ボウギョク
をどうにか出来るはず。

そうと解れば話は早い。長距離走なら自信がある。俺は目的地ま
での地図を頭に描き、地面を蹴り走る速度を上げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3903x/>

とある科学の十字障壁<クロスロード>

2011年10月20日08時21分発行